

熊野の
森林から



熊野灘にも出没した「船幽霊」は水難事故で無くなった人の亡者だという。海上に現れては「柄杓を貸せ」と脅し、うっかり渡すと柄杓で水を汲んで船を沈められる(イラストはBoBo)

怪野の熊



「船幽霊」
其の十八

和歌山大学
システム工学部
環境システム学科教授
中島敦司

熊野の沿岸では、昔から海難事故に関わる怪異の伝承が残されている。水難事故の亡者に変化した「船幽霊」と呼ばれる怪異の類がそれで、海底から泡とともに現れ、柄杓(ひしゃく)で船の中に水をどんどん汲(く)んで沈める。船幽霊が「柄杓を貸せ」と言ってきたら、底を抜いた柄杓を渡さないと沈められてしまう。だから、船幽霊を「柄杓かつぎ」と呼ぶ地方もある。

同じ熊野の中でも北の方では、嵐の時に空に頭がつかえてしまうほどの大入道の「たかほっさん」が現れて「柄杓を貸せ」と大声でがなり立てるといいます。その声に怯えてうっかり柄杓を渡してしまうと、船をわしづかみにして、またたくまに水を船へとくみ入れ、沈めてしまいう。熊野市では、海坊主が出てきて「柄杓を貸せ」と感わすとのことだ。

船幽霊の正体には諸説があるが、内部波による現象だと考える人もいる。例えば、河口に近い海域では塩分濃度の低い水塊ができ、軽いため海面付近に滞留し、塩分濃度の高い海水との間に明確な境界を形成する。海水の表面と下層の温度差が大きい場合にも、同じような境界ができる。その境界付近を船で漕いでも、スクリーンをいくら回転させても、エネルギーは水の境界をかき乱す内部波を作ることだけに消費され、船は進まなくなってしまう。それが船幽霊の正体だというのだが、内部波は船を沈めるわけ

ではない。むしろ、入道雲を連想させる「たかほっさん」の話からは、下降気流の強風や高波、夕立の雨が船に溜まって沈むと考える方が分かりやすい。一方、泡も危険である。泡は表面張力を小さくしてしまふので、水に浮かぶ物体の周囲が泡に包まれると静かに沈んでしまう。このため、紀伊半島沖での埋蔵が注目されているメタンハイドレードの溶解によって突然に噴出したメタンガスの泡による海難事故の可能性もある。高知では怪火とのセットで語られることがあるが、怪火がメタンガスに引火したものだと思えるとメタンハイドレード説もあり得ない話ではない。だとすると、船幽霊の伝承のある地域ではメタンハイドレードが意外に浅い位置にあるのかも知れない。妖怪の話は、今の資源探査にも使える可能性がある。



串本周辺の海域では「船幽霊」が出て船を沈めたというが、海底に埋蔵されているメタンハイドレードから噴出したガスによる海難事故だったのかも知れない。

中島敦司(なかしま あつし)教授プロフィール
昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年かから教授。51歳。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗(妖怪、伝承)。NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30〜50日は訪問し、研究する。

